

(3. 共同研究班活動報告)

3-8. 「表象と現象から読み解く——恐怖と不安定性」研究班

——研究準備報告——

中村 健太

本報告は、デイヴィッド・リンチ監督が1986年に製作した映画『ブルー・ベルベット』を通して、平穏な秩序ある表の世界に恐怖を呼び起こす裏の世界が出現するということを分析するものである。『ブルー・ベルベット』を題材に選んだ理由は、筆者の考える、社会における恐怖の存在を非常に的確に描写していると思われたことと、映画作品を分析することが社会的に意義のある作業だと考えたためである。

1 あらすじ

舞台はアメリカの小都市。病気で倒れた父を見舞いに帰省したジェフリーは、病院からの帰り道の空き地で、切り取られた人間の片耳を見つける。耳を拾ったジェフリーはすぐさま警察にそれを届ける。担当の刑事と顔見知りであったジェフリーは直接事件の内容を聞こうとするも断られてしまうが、刑事の娘サンディから情報を得る。サンディによると、以前から刑事が張り込みを行っている女性歌手ドロシーが事件に関係しているという。ジェフリーとサンディは二人で協力してそのアパートに忍び込む計画を立てる。

翌日、無事に忍び込み部屋の鍵を盗んだ二人は、夜、ドロシーが働いている際に彼女の部屋に入り込む。サンディはアパートの外で待ち、ジェフリーが中に入るという算段だったが、ジェフリーがまだ部屋にいるにも関わらずドロシーが帰宅してしまう。間一髪のところでクローゼットに隠れることに成功したジェフリーは、クローゼットの隙間からドロシーの様子をうかがう。そこでドロシーには夫と息子がおり、二人は誘拐されていることを耳にする。しかし、着替えのためにクローゼットを開けたドロシーに見つかり、包丁で問い詰められる。ジェフリーとドロシーがもみ合いになっていると、そこに来訪者が現れる。再びクローゼットに隠れたジェフリーは、フランクという高圧的な男を目にする。フランクはドロシーに暴力をふるいながらセックスをする。セックスが終わるとフランクは帰り、ジェフリーはクローゼットから出て彼女を気遣う。

翌日の夜、サンディと会ったジェフリーは昨日の話を報告する。その後、ドロシーの働くクラブに一人で行くと、そこでフランクを見つける。ショーが終わったあと、フランクとその一味を追跡するジェフリー。フランク一味は郊外にある工場地帯の大きな倉庫のようなところで車を停める。そこはフランクのアパートだった。

その後、一味のことを調べたジェフリーは、事件には黄色い服の男が絡んでいること、黄色

い服の男がワニ革のかばんの男に会ったこと、二人が工場に行つて麻薬密売絡みの殺人の現場を遠くから見ていたこと、そこで二人が警察は大量の麻薬を発見すると話していたことを突き止める。

それからジェフリーはみたびドロシーの家へ向かい彼女と会うが、帰り際にフランク一味と鉢合わせしてしまい、ドロシーも連れてドライブに付き合わされる。一味は「ベンのところ」へと向かう。「ベンのところ」とは「おかまのベン」が切り盛りしている怪しげな店のことで、そこでは麻薬の取引が行われていた。店につくとフランクは「子どもに会わせてやれ」と手下に言い、ベンのところを監禁されているドロシーの息子とドロシーを面会させるがある程度時間が経つと再び彼らをドライブに促す。車中で助手席にいたドロシーが後部座席のジェフリーを心配そうに見ると、運転していたフランクが「なにを見やがる、どういう関係だ?」と彼らを問い詰め、車を工場の廃材置き場のようなところに急停車させる。フランクはジェフリーを車から引きずり出し、ジェフリーを何度も殴りつける。

翌朝、郊外で目覚めるジェフリー。彼は家に帰ってサンディに電話をし、一連の出来事を刑事事であるサンディの父親に話すことを決意する。警察署に向かった彼は、なんとそこで黄色い服の男を見つける。彼はサンディの父親の同僚だったのだ。夜、サンディの家に向かったジェフリーはそこで刑事と話をする。話に衝撃を受けた刑事はジェフリーに、娘を巻き込まないでほしいと告げる。

翌日、サンディとダンスパーティに行ったジェフリーは、帰り道で傷だらけのドロシーを見つける。サンディの家にドロシーを連れて行った彼らだったが、ドロシーはジェフリーに抱き着く。その光景にショックを受けたサンディはジェフリーにたいして怒りをあらわにするが、その後の電話でサンディはジェフリーを許し、ジェフリーはサンディに、父親に対してドロシーの家に警察を行かせるように言うようにと言付ける。

ジェフリー自らもドロシーの家へ向かう。部屋に入ると、そこには重症の黄色い服の男と、すでに死んでいるドロシーの夫らしき人物がいた。男の背広のポケットには無線機が入っており、その無線機からは、警察が突入の合図を彼に送っている声が聞こえる。その場を去るジェフリーだったが、アパートを出ようとしたところでワニ革のカバンがアパートに来るのを見つける。そこで彼はワニ革のかばんの男が変装したフランクだったと気づき、慌ててドロシーの部屋まで戻ってくると、黄色い服の男が持っていた無線機を使い刑事と交信するが、フランクも無線機を持っていたため、会話の内容が筒抜けだった。それに気づいたジェフリーはベッドルームに隠れるから助けに来てほしいと言ひ残して、クローゼットに身をひそめる。部屋に来たフランクがベッドルームに直行するのを見たジェフリーは、男の胸ポケットから拳銃を奪い取り、再びクローゼットに隠れる。ジェフリーがクローゼットにいるのに気が付いたフランクはクローゼットを開けるが、開いたと同時にジェフリーに額を撃ち抜かれてしまう。ほぼ同時に刑事とサンディが部屋に入ってきて「終わったよ」と告げる。

ジェフリーには元通りの日常が戻り、ドロシーは子どもと再会して笑顔で抱き合う。

2 『ブルー・ベルベット』における二つの世界

本作は、二つの対照的な社会を描いている。二つの対照的な社会とは、リンチの言葉を借りて言うならば「とても無邪気で素朴な日常生活があると同時に、おぞましい事件と狂気が渦巻いているという風景」(Rodley 2005=2007:182)のことである。ここでは、一つの街に対照的な二つの社会が広がっていることを、作中の風景や描写に着目して考察する。

本作は、Bobby Vinton の歌う Blue Velvet に乗せて、舞台となる街が紹介されるシーンから始まる。それは晴れ渡った青い空、家々を区切る白い柵、柵の横に咲く真っ赤なバラの花、消防車に乗りながら笑顔で手を振る消防士という、事件などなにもない、平和で穏やかな街を象徴するかのような描写である。表の世界は、通りに面した均質的なつくりの家々が整然と並び、各家屋の庭は丁寧に手入れされている。また、横断歩道には、ボランティアをしている老人が旗を持って立ち、そこを渡る子どもたちを誘導している。さらに、表の世界の住人である、サンディや彼女の父親の刑事は、ジェフリーが裏の世界で見聞きし、体験したことを聞いても「信じられない」という反応を示し、まさかそんな恐ろしい出来事がこの平和な街で起こるはずはないといった反応を見せる。このように、表の世界のみを見て生活している人々は、自分たちが暮らしているランバートンという街は、平和で秩序だったところであり、そしてそれがこの街の全貌であると思って日々を送っている。だが、彼らの暮らす世界はランバートンのほんの一側面に過ぎない。

ではなぜ、表の世界の住人たちは、裏の世界を垣間見ずに平穏に生活できているのだろうか。結論から述べるならばそれは、表の世界の住人たちが自分たちの暮らす世界を囲い込み、恐怖の源泉である裏の世界に蓋をして見えなくしているからである。もちろん、彼らは裏の世界の存在さえ知らないのだから、裏の世界を知ったうえで、そちらと自分たちの世界を隔絶させようとしているのではなく、知らず知らずのうちに表と裏を区切り、裏にある恐怖の世界が表にしみ出してこないような枠組みをつくり出しているのだ。それでは、裏の世界にある恐怖が侵出してこないような仕組みとはいかなるものなのか。この問いにこたえるために、まずはランバートンに存在するもう一つの世界である裏の世界についての記述を行う。

裏の世界とは、フランクの存在に代表される、ランバートンが持つ影の部分である。そこは麻薬の取引、誘拐や凄惨な殺人といった暴力が幅を利かせている社会である。作中に出てくる、ドロシーの働くスロー・クラブ、ベンのお店、麻薬取引が行われていた倉庫といった場所はいずれも、ジェフリーやサンディたちが暮らす表の世界とは異なった区域に存在していた。また、ジェフリーがフランク一味にドライブに連れて行かれ、結果的に暴力を振るわれることになった場所も、郊外にある稼働しているのかどうかもわからないような工場の脇の荒地であった。このように裏の世界は、表の世界のように整序され、計画的に区画整理された家々が立ち並ぶ空間ではなく、郊外にぽつんとある、寂れたような空間が舞台となっているのだ。そこには、美しい街としてのランバートンとはまったく異なった風景が存在している。この裏の

世界は、M. フーコーの言う規律・訓練の仕組みが社会のなかに行きわたる以前の状態を彷彿とさせる。フーコーによると「社会の境界地域や組織間隙には、《無法者》特有の、あるいは少なくとも、権力の直接的掌握をまぬがれていた者に特有の、雑然として寛容で危険な領域が開かれていた」(Foucault 1975=1977:300)という。しかしこうした領域は、規律・訓練による従順な身体が生み出されたことによって社会の内側に包み込まれ、無法者(アウトロー)がなくなった代わりに非行者(前科者)として、法の内側に位置づけられるようになった。だが本作で登場する裏の世界は、警察も地域の目も認知していない、秩序だった社会の外側に存在する無法者たちが幅を利かせる世界だった。こうしてみると、無法者がうろつく「雑然として寛容で危険な領域」(Ibid.)は規律・訓練された人々の営む社会に回収されないまま、未だに存在するということが理解できる。

本作品は30年ほど前に製作された映画であり、現代を描いたものではない。しかし、我々が生きている社会の表の側面と裏の側面を切り取り、それを対比的に描写した作品という観点からみれば、本作品は、社会に生きる我々が避けて通れない“恐怖”というテーマを扱っていることがわかる。このように、映画作品は現実の一側面を切り取って表象する文化装置であり、そのため映画作品は、社会学の研究対象として十分に成立するものだと考えられる。本報告では紙幅の関係上十分な分析が行えなかったが、普段は隠されている裏の面が事件などをきっかけにして表面に浸出してくる状況は、我々自身がニュースに接することで日々見ている風景に他ならない、ということは言うまでもなく我々自身が痛感していることだろう。

【参考文献】

Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et Punir : Naissance de La Prison*, Paris : Éditions Gallimard. (=1977, 田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)

Rodley, Chris, 2005, *LYNCH ON LYNCH Revised Edition*. (=2007, 廣木明子・菊池淳子訳『映画作家が自身を語る デイヴィッド・リンチ [改訂増補版]』フィルムアート社.)